教育情報学研究　第７号（2008）
Educational Informatics Research, 2008, No. 7, 39-48

大学入学者選抜における「入試ミス」の分類指標作成の試み

西郡　大

東北大学大学院教育情報学教育部/日本学術振興会特別研究員

要旨：入試シーズンになると「入試ミス」が新聞等で報道されるが，一概に「入試ミス」と括られていてもその内容は一様ではない。そこで本資料では，「入試ミス」と呼ばれるものに，どのようなものがあるのかを分類するために，新聞記事を題材に分類指標を作成した。その結果，「入試ミスの事象・内容」，「入試ミスへの対応」，「判明契機」という大枠における各分類指標を示すことができた。特に，「入試ミスの事象・内容」における「出題関連ミス」，「試験実施・合格発表手続きミス」，「合否判定ミス」という分類視点は今後の研究に活用されることが期待できる。

キーワード：大学入試，入試ミス，分類指標

１．はじめに

一般的に，大学入学者選抜（以下，「大学入試」と略記）の手続きを考えたとき，その手続きが公正で厳格なルールに基づいて遂行されるべきだということに異論を唱える人は少ないだろう。仮に，不公正なルールや不備のある選抜手続きによって入試が実施されたとするならば，その手続きによって不合格にされた受験生は言うまでもなく，合格者ですら納得できるものではないことが予想される。つまり，合否の結果に関わらず，選抜手続きの公正性，厳格性は入試にとって大前提となるものであり，換言すれば，「入試の品質」を担保するものであると言っても過言ではない。特に，入学希望者総数が入学定員総数を下回る状況を示す大学全入時代の到来を背景に，「大学サバイバル」（古沢，**2001**）とも呼ばれるような熾烈な生存競争に晒されている各大学は，国公私立に関わらず学生確保が至上命題の１つであるといえる。仮に，不公正な入試を行っていることが判明すれば，多くの受験生から敬遠され，学生確保に支障を来たすかもしれないし，最悪なケースに至っては大学の経営基盤を揺るがしかねない。とすれば，積極的に不公正な入試を実施しようとする大学は基本的に有り得ないはずであろう。しかしながら，時として，「入試の品質」に嫌疑がかかる場面に我々は直面することがある。それが「入試ミス」である。例年，入試シーズンになると出題ミスや合否判定ミスなどの「入試ミス」が新聞等で報道され，各大学の「入試の品質」が露呈する。重大なミスはもちろん，単純なミスでも連続して発生すれば，当該大学の入試に対するイメージが損なわれる。これは，「入試ミス」が「入試の品質」を脅かすリスクとして隣り合わせにある問題であることを示している。文部科学省（以下，「文科省」と略記）が，入試ミスに関して，各国公私立大学大学長宛に「大学入学者選抜における出題・合否判定ミス等の再発防止について（通知）」（参考資料Ⅰ）[1] という形で毎年注意を促していることからみても，個別大学の「入試ミス」が，入試制度全体に関わる「入試の品質」として，大きく関与していることが窺える。

このように「入試ミス」は，「入試の品質」を考える上での一つの要素だと考えることができる。しかしながら，「入試ミス」そのものを俯瞰するような試みは管見の限り見当たらない。そのために様々な「入試ミス」が存在するにも関わらず，「入試ミス」を分類するための枠組みとなる指標がほとんど存在しない。そこで本稿では，これまで「入試ミス」に関して報道されてきた新聞記事を題材に，一概に「入試ミス」と括られるものを分類するための指標を作成することを目的とする。

２．方法

2-1. 題材とする記事の選定

題材とする記事は，決め細やかな検索処理が可能な「聞蔵 Digital News Archives for libraries」

という記事検索システムを持つ朝日新聞の記事に限定した。本稿の目的が正確な事例件数の把握よりも指標作成にあることを考えれば，対象とする新聞社は一社で十分であると判断した。なお，本検索システムは，対象紙名として「朝日新聞」だけでなく，「アエラ」と「週刊朝日」も検索対象に設定できるが，「朝日新聞」本紙のみを検索対象とした。これは同時に，地方版も合わせて検索される。

検索の対象期間は，センター試験が実施された年である1990年の１月１日から2007年12月31日までとした。その理由は次の３点である。まず，当該期間は，一貫してセンター試験が行われており，ほぼ同じ入試制度の下で各大学の入試が実施されていること。次に，戦後から1990年までの新聞記事についても同様に検索を行ったが入試ミスに関する記事が極端に少ないこと。最後に，「聞蔵 Digital News Archives for librariesⅡ」の記事内容に関する全文検索機能が，1984年８月以降の記事しか対応していないことである[2)]。

記事の検索は，「入試」と「ミス」をキーワードとしたAND検索を行った。検索当初は，「入試」ではなく，「大学入試」で検索を行ったが，抽出される記事が限定された範囲になってしまったことから，「大学」を取り除くことにした。結果的に，中学や高校の入試に関する記事も抽出されることになったが，当初よりもかなり多くの大学入試に関するミスも同時に抽出された。そのため，個別大学の学部入試[3)]に関係しないセンター試験や中学，高校，大学院および専門学校等の入試ミスに関する記事については，目視確認によって手作業で題材対象から外した。また，学部入試においても推薦入学試験やAO入試を除く，帰国子女選抜，社会人入学試験，編入学試験などの特殊な入学試験は題材対象から外すことにした。

2-2. 指標作成の方針

まず，指標作成の参考にする資料として，平成16年12月20日に文科省が各大学に通達した通知に資料として添付されていた入試ミスの事例及び対応例（参考資料Ⅱ）を利用した。本資料は，毎年，全国各地で実施される「大学入学者選抜・教務関係事項連絡協議会」においても，配布資料として使用されたことがあり，入試ミスの事例概要を把握するために参考になる指標だと思われる。これらの指標を用いて，抽出された記事がどの程度分類できるかを試みたところ，そのままの指標として分類可能のものもあるが，統合した方が良いもの，削除しても構わないもの，新たに作成が必要なものなどが見出された。したがって，抽出された記事が出来る限り多く分類できるように参考指標の再構成を行い，新たな分類指標を作成することにした。なお，新たな指標の作成や指標の統合等は，事象や対応などをカテゴリー化するという手順を踏むために，自由記述の意見を観点別にカテゴリー化した研究（西郡・木村・佐藤・倉元・柳井，2007；西郡・倉元，2007）を参考にした。

３．結果

「入試」と「ミス」のAND検索で機械的に抽出された記事は1720件であった。その中から，個別大学の学部入試に関係しない入試ミスに関する記事を除いた507件について分類指標を作成するための題材記事とした。なお，同じ事例に関して複数の報道（例えば，報道日時や全国紙と地方紙など）がされているものについては，統一して１件とみなすことにした。抽出された記事には，大きく分けて「入試ミスの事象・内容」「入試ミスへの対応」「判明契機」という３つの情報の柱が挙げられる。したがって，この３つの枠組みからみた分類指標を以下に示すことにする。

3-1. 入試ミスの事象・内容に関する分類指標

入試ミスの事象・内容に関する分類指標は，大きく「Ⅰ.出題関連ミス」，「Ⅱ.試験実施・合格発表手続きミス」，「Ⅲ.合否判定ミス」の３つに大別された（表１）。なお，該当件数とは，該当した記事の件数のことである。

「Ⅰ．出題関連ミス」は，出題された試験問題そのものにミスがある事例からなる。本指標は，「１．出題者が意図した正答を導き出せない」「２．単純な誤字・脱字」「３．募集要項で指定した出題範囲を逸脱している」「４．学習指導要領を逸脱している」「５．解答に有利・不利が生じる可能性がある」「６．リスニングテストにおける問題テープの編集ミス」「７．問題冊子に教示ミスがある」「８．解答用紙にミスがある」という８つのサブカテゴリーか

表１　入試ミスの事象・内容に関する分類指標

分類指標	該当件数
【Ⅰ．出題関連ミス】 1. 出題者が意図した正答を導き出せない ➢ 正解を導き出せない ➢ 正解が複数ある ➢ 問題文（図や表を含む）に誤りがある ➢ 問題文が不十分である ➢ 「出題ミス」とのみ記事に記されているもの	243
2. 単純な誤字・脱字	38
3. 募集要項で指定した出題範囲を逸脱している	24
4. 学習指導要領を逸脱している ➢ 新旧課程の相違によるものを含む	13
5. 解答に有利・不利が生じる可能性がある ➢ 漢字の書き取りで解答が他の設問等に存在する ➢ 過去に出題した問題と同じ問題を出題した ➢ 同じ問題冊子に綴じられている他教科にヒントが存在する ➢ 一部の教科書に掲載されている問題を出題	13
6. リスニングテストにおける問題テープの編集ミス	7
7. 問題冊子に教示ミスがある ➢ 選択すべき教科の指定など	5
8. 解答用紙にミスがある	3
【Ⅱ．試験実施・合格発表手続きミス】 1. 問題用紙の配布ミス ➢ 問題冊子の一部に乱丁・落丁 ➢ 解答のヒントになるもの（計算過程や正解が記載されたもの）を配布	12
2. 回答用紙の回収ミス ➢ 回収漏れ ➢ 回収した回答用紙の紛失	2
3. 試験時間に関するミス ➢ 試験開始時間が遅延 ➢ 試験時間が規定よりも短くなった ➢ 試験時間が規定よりも長くなった	9
4. 一般的な指示/確認/手続きミス	6
5. 面接試験に関するミス	3
6. 合格発表関連手続きミス ➢ 追加合格に関する連絡 ➢ 郵送（連絡）ミス	9
7. その他	2
【Ⅲ．合否判定ミス】 ➢ 出題ミスが原因のもの ➢ 採点ミスが原因のもの ➢ 事務手続きのミスによるもの ➢ コンピュータの合否判定プログラム設定ミス	118

ら構成され，該当する記事の件数は346件と最も多い。中でも「１．出題者が意図した正答を導き出せない」という事例件数は243件と大部分を占めており，入試ミスとして一般的に報道されるものには，「正解を導き出せない」「正解が複数ある」「問題文(図や表を含む)」といった事例が多いことを示している。

「Ⅱ．試験実施・合格発表手続きミス」は，入学試験を実施時における試験監督者や関係職員等による人為的な手続きミスを含むものである。本指標は，「１．問題用紙の配布ミス」「２．回答用紙の回収ミス」「３．試験時間に関するミス」「４．一般的な指示/確認/手続きミス」「５．面接試験に関するミス」「６．合格発表関連手続きミス」「７．その他」という７つのサブカテゴリーから構成されており，該当する記事の件数は43件と全記事の一割弱程度を占める。

「Ⅲ．合否判定ミス」は，「出題ミス」「採点ミス」「事務手続きのミス」「コンピュータの合否判定プログラム設定ミス」などが原因となって，合否判定に影響を与える事例である。事例によっては，追加合格者を出す場合や複数年に渡って合否判定を誤っていたなど，社会的影響の程度が相対的に大きい事例である。該当する記事の件数は118件と全記事の２割強を占めている。なお，ここで原因として示した「出題ミス」は，「Ⅰ．出題関連ミス」に含まれる該当件数には含まれない。

3-2. 入試ミスへの対応に関する分類指標

入試ミスへの対応は，「１．特別な採点方法を採用」「２．試験時間中に当該箇所を修正」「３．試験時間を延長する」「４．特例措置を実施する」「５．特段の措置は講じない」「６．正規の合格発表手続きをやり直す」「７．記事に対応の記載が無い」「８．その他」のサブカテゴリーから構成される指標である（表２)。本指標は，入試ミスの事象・内容に関する分類指標の「Ⅰ．出題関連ミス」と「Ⅱ．試験実施・合格発表手続きミス」に該当する全事例389件に記載されていた記事から作成したものでため，「Ⅲ．合否判定ミス」に該当する事例には適用外である。その理由は，合否判定ミスという事象が，ミスの影響度に応じて，「全員への陳謝（事象説明を含む)」「お詫び金やその他必要経費の補償」「対象者入学後のサポート」「国家賠償」などの対処の組

表２　入試ミスへの対応に関する分類指標

分類指標	該当件数
1. 特別な採点方法を採用 ➢ 受験生全員を正解とする ➢ 該当する正答全てを正解とする ➢ 採点対象から該当問題を外す ➢ 配点を変更する ➢ 得点調整を行う ➢ 回収漏れの回答を満点にする ➢ 関連する問題に加点する	294
2. 試験時間中に当該箇所を修正	19
3. 試験時間を延長する	9
4. 特例措置を実施する ➢ 出題内容を変更してやり直す ➢ 再テストを実施 ➢ 合格者数を増やす ➢ 試験開始時間の調整	13
5. 特段の措置は講じない	33
6. 正規の合格発表手続きをやり直す	4
7. 記事に対応の記載が無い	14
8. その他	3

表３　各事例に対する入試ミスへの対応

		Ⅰ．出題関連ミス								Ⅱ．試験実施・合格発表手続きミス						
		1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7
入試ミスへの対応	1	215	11	20	13	11	4	4	2	3	2	4	5			
	2	9	7	1				1				1				
	3	1	3				1			1		1	1			1
	4	1		1						6		1		2	2	
	5	9	15	2		2	2		1	1				1		
	6														4	
	7	8	2									1			3	
	8									1		1				1

（数値は，該当する記事の件数）

み合わせによって対応がなされ，合否判定ミスにおける任意の一事例に対して，一対一で対応するような入試ミスへの対応指標を作成することが困難であったためである。

本指標を用いて，「Ⅰ．出題関連ミス」と「Ⅱ．試験実施・合格発表手続きミス」の各事例に対する入試ミスの対応をまとめたものが表３である。「Ⅰ．出題関連ミス」の数字〈１～８〉，「Ⅱ．試験実施・合格発表手続きミス」の数字〈１～７〉は，表１における該当部分の各指標の数値を示しており，「入試ミスへの対応」の数字〈１～８〉は表２の各指標の数値を示している。最も入試ミスの事例として多かった「１．出題者が意図した正答を導き出せない」の対応は，「受験生全員を正解にする」「該当する正答全てを正解とする」などを含む「特別な採点方法を採用する」であった。その他については，規模や程度といった状況および発生した大学によって様々であった。

3-3. 入試ミスへの判明契機に関する分類指標

入試ミスが判明する契機は，「１．外部（予備校/塾/出版社/高校教師など）からの指摘」が67件，「２．受験生（保護者を含む）からの指摘」が50件，「３．大学内の自主点検及び試験監督からの指摘」が41件，「４．採点中に発見」が26件，「５．記事に記載なし」が323件であった。「５．記事に記載なし」が最も多いことから３つの情報の柱に挙げるのは不十分だとも考えられるが，判明契機は，判明時期とも関係が有り，合否判定ミスという重大な問題に直結する。特に，新年度開始後に追加合格者が出る場合には，その影響が大きいことが予想されるため，入試ミスの判明契機は重要な指標であると考えられる。

４．まとめ

本稿では，一般的に「入試ミス」と括られる事象について分類指標を作成した。この分類指標が，どのように有効活用されることが望ましいかについて触れたい。冒頭でも示したように「入試の品質」を一定以上保つためには，「入試ミス」を出来る限り抑制する必要がある。しかしながら，文科省も入試ミスの事例などを提示して，出題・合否判定ミスの再発防止について注意喚起を促してはいるものの入試ミス発生件数が減少には転じる様子はみられない[4)]。これは，「入試ミス」の発生自体を完全に抑えきることの難しさを示しているといえるだろう。その一因として，選抜方法の多様化やその手続きの煩雑さが考えられるわけだが，「入試ミス」を抑制するためだけに，選抜方法や評価方法の多様化の趨勢を覆すことは現実的ではない。となれば，こうした多様化の趨勢を前提とした入試ミス抑制の努力が必要となるだろう。そう考えたとき，何が大学や社会にとって深刻な入試ミスとなるのか，また，何が深刻でない見過ごせる程度のミスなのかといった入試ミスによる影響度の検討といった発展的な研究が期待される。その先行研究として，本分類指標は重要な枠組みになることが考えられる。特に，追加合格者が発生するような「合否判定ミス」に関する事例は，その他の入試ミスに比して影響度が大きい[5)]。本稿では，「合否判定ミス」に関する影響度を分類

するための具体的な指標こそ明示していないが，入試ミスの「判明時期」や「複数年度」にわたる追加合格者の発生，また，入試ミスの「隠蔽疑惑」などは，入試ミスの影響度を十分に検討すべき観点であり，影響度分類を行う上で重要なキーワードになることを指摘できる。これらの知見が今後の研究で発展的に活用されることを期待したい。

注釈

1）参考資料Ⅰ・Ⅱは，東北大学の入試課が所有している資料を許可のもと拝借し，筆者がそれらの資料を忠実に電子ファイルとしてリライトしたものである。なお，関係者の押印や電話番号等の情報は，掲載しないように編集した。

2）1984年8月以前の記事は，見出しや主要キーワードを対象にしか検索しかできない。

3）本資料で対象とする大学は短期大学も含む。文科省のホームページに文部科学省関係リンク集（http://www.mext.go.jp/b_menu/link/main_b12.htm）としてリンクされている「国立大学」「公立大学」「国公私立短期大学」「私立大学」にないものは対象から外した。

4）文科省が平成20年3月10日に，事務連絡として国公立大学入試担当課長宛に通知した「平成20年度国公立大学入学者選抜個別学力検査における出題・実施ミスについて」には，「本年度は例年と比較し，入試ミスが多い状況となっております」と記載されている。

5）平成16年12月20日に文科省が各大学に通達した通知に資料として添付されていた「大学入試でのミス年度別一覧」でも追加合格を出したミスの件数は，特別に集計されている。

文献

古沢由紀子（2001).『大学サバイバル－再生への選択』. 集英社新書.

文部科学省（2004).「大学入学者選抜における出題・合否判定ミス等の再発防止について（通知)」, 16高大振第77号,平成16年12月20日.

文部科学省（2006).「大学入学者選抜における出題・合否判定ミス等の再発防止について（通知)」, 18高大振第68号,平成18年12月27日.

西郡大・木村拓也・佐藤洋之・倉元直樹・柳井晴夫（2007).「学習意欲・学力低下に関する大学教員の自由記述分析－2004年の国公私立大学における教員調査をもとに－」.『大学入試研究ジャーナル』, 17, pp.221-228.

西郡大・倉元直樹（2007).「日本の大学入試をめぐる社会心理学的公正研究の試み －『AO入試』に関する分析－」. 日本テスト学会誌, 3.pp.147-160.

謝辞

本資料を作成するにあたり，貴重な資料とアドバイスを頂いた東北大学入試課の菊田智氏に深く感謝いたします。

A trial study of standards to classify "procedural mistake about admissions" on university admissions.

Dai Nishigori

Education Division, Tohoku University School of Educational Informatics.
Reseach Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science.

abstract

The purpose of this study was to make standards to classify "procedural mistake about admissions (PMA)" on university admissions. As a result, I could classify articles of newspaper about "PMA" into three categories; "event or content about PMA", "coping with a problem", "discovery opportunity of PMA". Particularly, I expected the following three sub standards related to "event or content about PMA"; "the trouble about test question", "the trouble about examination procedure or announcement of the result of examination", are used in the future researches.

Key words: university admissions, procedural mistake about admissions

参考資料Ⅰ

18 高大振第 68 号
平成 18 年 12 月 27 日

各国公私立大学長　殿

文部科学省高等教育局大学振興課長
中 岡　司

(印影印刷)

大学入学者選抜における出題・合否判定ミス等の再発防止について（通知）

本件については，平成 18 年 5 月 29 日付け 18 文科高第 124 号「平成 19 年度大学入学者選抜実施要項について（通知）」及び平成 17 年 12 月 20 日付け 17 高大振第 87 号「大学入学者選抜における出題・合否判定ミス等の再発防止について（通知）」で周知しているところでありますが，学部における入試ミスだけでなく，大学院における入試ミス，募集要項の作成段階でのミス，追加合格における手続きミス等，ミスの態様・件数とも増加してきている状況であり，非常に遺憾なことであります。

ついては，平成 19 年度一般入学者選抜試験を目前に控え，貴大学におかれては，改めて以下の点に特に留意し，出題・合否判定ミス等がないよう万全を期すようお願いいたします。

なお，入試ミスが生じた場合には，別紙入試ミス報告事項例を参考に速やかに当課大学入試室に連絡されますよう併せてお願いいたします。

記

1．入試業務のプロセス全体を把握した上で，ミスを防止するためのガイドラインを作成すること等により，入試業務全体のチェック体制を確立すること。
　また，入学者選抜に関わる者の責務を明確にし，責任をもって入試業務を行うよう注意を喚起すること。
2．教員，事務職員等関係者が一体となり，緊急時の対応における迅速性及び公平性の確保を含めた円滑な試験実施・伝達体制の確立に努めること。
3．試験問題の点検については，試験実施直前に点検するだけでなく，試験開始後においては特に速やかに，作題者以外の者も含めて，二重三重に点検を行うこと等により，ミスの防止及び早期発見に努めること。なお，問題の文面だけでなく，問題の内容についても正答が導き出せるか確認すること。
4．採点業務については，コンピュータプログラムのチェックを含め，試験開始前及び試験開始後において，点検・確認し，万全を期すこと。
5．追加合格者決定については，その決定手続きに関するマニュアルを作成する等，実施体制，決定手続を明確にし，公正な実施に努めること。
6．各担当毎の業務は必ず複数人で行い，相互に確認する体制を確立すること。

担当：大学振興課大学入試室
電話：(代) ■■■■■ (内線■■■)

別　　紙

入試ミス報告事例

１．概　要

(ア) 選抜区分、試験実施日及び合格発表日

(イ) 試験科目名（必須、選択）

(ウ) 選抜方法

(エ) 当該選抜区分の募集人員及びミス科目の受験者数（選択科目の場合、全体の受験者数等）

(オ) ミスの内容

(カ) ミスの発見状況（発見者、発見日時等）

【以下，出題ミスの場合】

(キ) 当該問題の抜粋

(ク) 当該問題の配点（配点／満点）

２．対策等

(ケ) ミスが起こった原因（作成時のチェック体制、試験実施体制等）

(コ) 当該ミスへの対応（選択科目の場合、他の選択科目名及び科目間における得点調整の有無等）

(サ) 受験生への周知方法

(シ) 記者発表の有無

３．再発防止対策等（後日）

(ス) チェック体制の見直し（新旧比較等）

(セ) 関係者の処分の有無（処分がある場合、処分内容等）

参考資料Ⅱ

平成１７年度入試ミスの事例及び対応例

Ⅰ．入試ミスの例

【出題・採点ミス】

1　正解を導き出せない
2　正解が複数ある。
3　学習指導要領を逸脱している。
4　出題範囲を逸脱している。
5　誤字・脱字がある。
6　問題文に誤記がある。
7　漢字の書き取りにおいて，解答が他の設問等に出ている。

【試験実施ミス】

1　放送設備の動作不良により，試験中に音声が中断した。
2　問題冊子の一部に乱丁があった。
3　試験中に火災報知機の誤作動により警報が鳴った。
4　回答用紙の回収漏れがあった。
5　試験開始時間が遅れた。

Ⅱ．ミスへの対応例

【出題・採点ミス】

1　受験生全員を正解とする。
2　複数の解答を正解とする。
3　試験時間を延長する。
4　特段の措置を講じない。

【試験実施ミス】

1　試験時間を延長する。
2　回収漏れした回答用紙分を満点とする。
3　特段の措置を講じない。

Ⅲ．合否判定時の対応例（出題ミスが選択科目だった場合）

1　加点前の素点により合否判定したのち，該当者に加点し合格点に達する者を更に合格とする。
2　加点した後に選択科目間の平均点を比較し，一定の格差が生じた場合に得点調整を行った後に合否判定。
3　単純加点により合否判定。